
Shadow hanter

糸雅涼明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S h a d o w h a n t e r

【Nコード】

N 9 6 1 7 A

【作者名】

糸雅涼明

【あらすじ】

時は2040年、文明の利器を利用し戦争が各地で勃発世界の半分近くが滅びた、戦争で生まれた様々な感情が蒸気となって溢れかえった、それを使い世界を破滅に導こうと考える組織が「影」を造る。影は次から次へと地を蝕んで行くそれを阻止するため各国の政府が考案した軍事機関こそ「Shadowhunter」別名影の始末屋。彼等のみが「影」に対抗できる唯一の存在、そして世界を混沌に導く組織の破壊を目指す

プロローグ（前書き）

グロテスクな表現が時折ありますので
苦手な方はご注意ください

プロローグ

時は2040年、平和であるはずの世界は滅んだ

世界で戦争が勃発し、人々の憎悪や悲しみが溢れ返り

秩序は崩壊し、世界の七割が荒廃した。

影の念に地球は壊され、

人の感情から生まれた影が全てを無に変える。

Shadow hunter

荒れた大地にぽつりと建つ小屋。

そこから無数の悲鳴と呻き声が聞こえる

暫くして一人の若い男が小屋から出てきた

その男は近くの岩場に腰掛けている女に話しかけた

「任務名…歪んだ家。終了だぜ、ラスト」

「任務達成ご苦労、コウガ。」

男はコウガ・ソナ、中国人

赤茶の服を纏っている、その腰には刀が備えられていた

女はラスト・アルグ、英国人、短い金髪に隻眼。

左腕は義手で腰には小さな袋が幾つも装備されている

彼等は軍事機関の者で影の始末屋。

人々の感情から生まれた凶悪な影を消す者。

「はぁ・・・歪んだもなにもただ単に影に侵された人だったな」

「何だそうだったのか、またボスは適当なことを・・・」

「いつもの事だろ」

「しかし、お前はまた派手にやったな」

「そうか？」

「その返り血は何だ？拭いておけ、臭い」

「ん、分かってる。」

ラストに向かってフツと微笑む、顔に付いた返り血を拭いた後
次の任務先を尋ねた

「次のターゲットはすぐそこにあるトンネルの中だ」

「あーアレか・・・影は？」

「魔獣タイプの憎悪だ」

「え、ちよっ・・・マジでか？」

「マジだ」

「はぁ・・・魔獣タイプね・・・」

アレとは遣り合いたくないんだけどな」

コウガはラストの腕に視線をやる。

彼女の左腕は人の形をしていない魔獣タイプの影と対峙した
最初の日にもぎ取られてしまった

以後、義手が付けられたが魔獣タイプ
を相手にする度に何度か壊されてしまうのだ

「まあ、仕方ない、今は金のためと思えばいいだろ」

「そうだな・・・もう野宿での生活はうんざりだ。」

2人はトンネルへ向かう・・・

プロローグ（後書き）

未熟なSF小説です

楽しんでいただければ幸いなり

EP2消えぬ煙

コウガ達が向かった任務先のトンネル、その入り口に男が2人立っていた

一人は赤髪の男、年齢は20代後半と言ったところか、口元に煙草を銜える。

顔には幾つか傷があり、右目にも縦線の傷がある

もう一人は普通より少し背が低めの男。赤髪の男の部下のようだ

黒い長髪を後ろで一まとめにし、眼鏡を掛けている。

顔が少し童顔気味の所為か、実際20代なのだが10代の少年に見えてしまう。

2人は影の始末屋、ヨーロッパ支部の幹部だ

赤髪の男はカルロ・ティブロン、アメリカ人でヨーロッパ支部の1代目ボスだ。

黒髪男はオリバー・ブルックハット。カルロの側近であり、他に支

部の会計を役割とする

「彼らは無事任務を済ませ、2つ目の任務に現在挑んでいます」

オリバーが伝えた

「そーかい、あいつ・・・無茶してねえだろうな。」

煙草を銜えたまま話すカルロ。心配する割には随分と能天気な声だ。

「救援が求められた際には本部から「彼等」が来るよう手配してあります。

近くまで来ているそうです」

「何だあオイ、久しぶりにアイツ等か？そんなヤワじゃねーよコウガは、必要ない」

そんな彼の言葉も空しく、オリバーの胸元から携帯が鳴る音が響く

「期待しすぎなんですよ、ボスは・・・」

「あーあ・・・」

携帯を取り、対話をするオリバー、その姿を見つめる事無く

カルロは燃え尽きた煙草を地面に捨て、また新しい煙草に火を灯そうとした、が

その手首をオリバーが止める

「いい加減禁煙したらどうです？味が消える度に留めなく吸って・・そんなんじゃないつか肺がとんでもない事になりますぞ」

「俺ア絶対禁煙しねえ。」

「四六時中煙草吸って町をほっつき歩いてるから子供にオジサン扱いされるんですよ。」

「てめっ、誰がオジサンだコノヤロー」

さっきまでの気だるくも冷静な対応が嘘の様にひっくり返る
ボスは困ったことに「おじさん」とか「三十路」とか言われると支部員には
容赦なく切れる。何故なら、三十路前であることを大いに気にしているからだ

「ともあれ・・ラスタから連絡が」

「無視か！！・・まあいいや、何だって？」

「Ⅱ彼等Ⅱを此方に送って欲しいと」

「あー・・・そう。根性ねえなあんにゃろ」

「さっきまで心配してたくせに何ですかその仕打ちは」

「うっせーよ」

いつの間にか彼は煙草を口に銜え、火を近づけていた
しかしまたオリバーの手がそれを止める・・・ではなく
今度はカルロの手からライターを引っつかみ、その火を彼の額に掛
かる

前髪に掛けた。当然前髪に掛かった炎は額にも直撃する

「うおおあああっつっ!!」

両手で額を押さえ、涙ぐみながら大声で叫ぶ

「てんめえええ何てことしてくれんじゃ!! また眉毛が焦げたぞ
!」

「禁煙しろっつってんでしょコノヤロー。しばきますよ」

ライターをそこら辺に投げ捨てながら言う

優しさを帯びたオリバーの目から殺意が湧き上がる。

実際腹黒いからこうなることはしょっちゅうらしい

「相変わらずそんなやり取りをしてるのね」

2人の背後から女の声が聞こえる、振り返ると男と女がペアで立っ

ていた

「マナ、峰青・・・五部沙汰ですね」

「オウ、早かったな」

「相変わらずのようだな、お前達の漫才は」

「漫才じゃねーよ。そんなに可笑しいか俺等のやり取り」

「ああ可笑的い、実にお笑いだ」

真顔でそんな言葉を発言する男、峰青。

そして隣でクスクス笑う女、マナ。

この二人は始末屋本部から送られてくる
ヨーロッパ支部直属の隊員だ。

峰青は名前から分かる通り日本人。

両目をマスクで隠し、仮面でも被ってるかのような無表情。

彼は日本伝説の忍者をモチーフにした戦闘術を繰り広げる。

右腕には趣味だろうか、梵字の描かれた布を巻いている

一方マナは峰青とは正反対で天真爛漫。

明るい緑と黒の髪の毛を持つマレー人である。

しかし彼女は服装の露出が少々激しい、オマケにスタイルが良いものだからそこらじゅうの男の的になっている。

「お前等も変わんないな、俺等と。」

「あら、そう？別に私達アンタらみたいな事はしないよ」

「まあ普通はそうでしょうね」

「マナ、一つ言いたい・・・」

「何よ？」

「いい加減肌の露出を控えろ」

「うるっさいわね！これが落ち着つくの！後あつつのよ！
っていうかソレ今日で5回目ようもう！！」

「変わってませんね」

「まあいい・・・で、コウガ等から救援信号があつたんだな？」

諦めたように峰青がオリバーに向き直る

「ええ、この中です。」

「早く行った方がいいぜ、相手手こずってるみたいだ」

「解かった・・・行くぞマナ」

「ん、OK」

2人は洞窟に入り、やがて暗闇に消えた

洞窟の中からは何故か煙がたっている、
混沌とした世界の一部では其処彼処から煙は出る

彼等の胸の中にも、疑問の煙が後を経たない

何のために闘ってる――？

EP2消えぬ煙（後書き）

一瞬「は？」と思った方も

いらっしやるでしょうから説明します

このタイトルの意味は

心に過る不安を意味しています。

EP3裏切り

コウガ達が洞窟に入ってから20分・・・

ようやく出てきた4人は怪我を負っていた

コウガは峰青に担がれていたが取り合えず全員軽症で済んだ

「オイオイオイ大丈夫かお前等？」

「心配ない、全員歩ける。」

「何だったのよアイツ、馬鹿みたいに強くてシャレになんないわ・・・
キリが付かない」

溜息混じりにマナが言う

「ちょっと待ってください、キリが付かないって事はまさか途中放棄したんですか？」

オリバーがマナに迫る

睨みつけるオリバーの視線にたじろきながらもマナは話した

「そうなのよゴメン、でもコレは情報ミスなんじゃないの？」

「相手は・・・何だったのか？人型じゃなかったか？」

「私等が受け取った資料には魔獣タイプだとあったが？」

「あ、ヤベ！悪い、ソレ一級戦士用だった・・・」

事の重大さによりやく気付いたのか4人に謝るカルロだが

「オーイおっさん・・・しっかりしてくれよ、だからお前はおっさんなんだ」

コウガのこの言葉が彼の心に火をつける事になる

「テーマエ誰がおっさんだコラアアア！！！」

「何だよやんのか三十路め！」

「俺はまだ28だコノヤロー！！」

見事にブチ切れたカルロ、怪我をしてるのにも関わらず喧嘩に乗るコウガ

もう二人を止められるものは居ない

一人除いて

「やれやれ・・・学習能力の無い奴め。」

「ホント馬鹿みたい、ラスト、何とかしてちよーだい」

「一言言っておこう、無理だ。あんなったやつ等を止められるのはお前しか居ない、オリバー、頼む」

「何で私が命令される側なんですか」

「これは命令ではない、頼みさお前しかいないんだ、な？」

「まったく面倒くさい・・・」

ぶつくさ文句を言いながら彼は喚いてる2人の元に歩み寄り
そして・・・

「ボス、すいませんこれ以上脳細胞が減らなきゃいいんですが」
拳を思いっきりカルロの頭に向けて打った

スパーーーーーン！

と気持ちのいい音が響き渡り、踏ん張る事無くカルロは昏倒した
そして次のターゲット、コウガの元にも歩み寄っていく

「アレ・・・？オリバー？ちょっと、え？俺も・・・？」

「当たり前でしょう、貴方が原因なんです、また私に面倒をかけま

したね」

「えええええ！誰か止めてくれエエエ！」

コウガの抵抗も空しくあっさり彼も昏倒

顔面にグーパンチを一発もらった

死んだ魚の様に無力な2人を運んで
全員は支部に戻った。

ヨーロッパ支部、コウガ達は医療室に向かい、治療を受けていた

「また問題起こしてくれたみたいだなお前等」

そうぶっきらぼうに言うのは長い白髪頭で白衣を着た
若いドイツ人の男、アルヴァだ。

「大体お互いの性格を理解してなさすぎる、もう此処に居て
15年だろ？」

「っせーな、んなもん関係ねえ。」

煙草の灰を床に落としながらカルロがキレ気味で言う。

「俺は悪くないからな！」

と、責任を相手に押し付けるコウガ。

「いやどっちも悪い。一体何回同じ事を繰り返すんだ。それに・・・カルロ、お前もいい年こいて単細胞ってのはみっともないぞ。」

「やんのかテメェ」

「ほら見る直ぐコレだ」

カルロの喧嘩腰にも全く動じずアルヴァは至って冷静な態度を取る

「オリバー、お前も止める時は手加減しろよ？」

これ以上こいつの脳細胞が減ったら鳥頭になっちまうからな」

「そうですね・・・まあその方が愉快なんですが」

「お前いつか殺してやるからな！」

「バカゲンカもいい加減にしてよ、付き合いきれないわ」

溜息吐きながらマナが言う、呆れ果てているようだ

「お前達バカに付き合ってる暇は俺たちには無い、次の任務が待ってるからな、帰るぞ」

「あ、おい待ってくれ」

扉に向かおうとする峰青、その背にアルヴァが声を掛けた

「何だ？」

彼は迷惑そうな顔をした、目は隠れてるが
そんな風に見えた

「お前のその右目・・・何時になったら俺に見せてくれるんだ？」

「・・・この目は誰にも見せない。というよりは見させてはいけ
ないんだ。」

悪いが諦めてくれ」

眼帯にも似た形をしたマスクを付けている右目を
そっと抑えながら彼は言い、出て行った

「何だアイツ、つれねーな・・・」

「ボス、峰青の右目って、俺も気になるんだよね。」

コウガが興味津々な様子でカルロに話しかけるが
カルロはその質問を跳ね返す

「あの目は芯がぶつとくなく見れるもんじゃないぜ」

「って事はアンタは見たのか？」

「ああ見たぜ、俺はボスだ、仲間の顔はちゃんと見ておかないとな。」

だが、アイツの左目に関しては何も探るな。奴を傷付ける事になる」

「それってどういう・・・」

「もうこれ以上はその事を喋らねえ、お前は晩飯の時間まで部屋に居ろ」

「・・・わーったよ。」

「あー・・・暇だなあ」

とぶつくさ言いながら部屋でごろごろするコウガ。

待てと言われてから既に1時間経っている

「晩飯まで待てって言われてもまだ昼3時だぜ、何考えてんだあのおっさん」

暇すぎて眠気さえ感じる、昼寝でもしようかと思ったその時・・・

ジリリリリリリリ！！

非常ベルが大きく部屋に響き渡った

「うわっ！何だ？」

驚いて飛び上がり、彼は一目散に部屋のドアを開けた

館内のアナウンスがベルと同時に鳴る

『火災発生！3階、倉庫で火災発生！』

「火事い・・・？」

たちまち廊下は人で埋め尽くされた、隊員達は避難する者も居れば3階へ向かう消防隊の者、様子を伺うように階段から3階を覗く奴も居た。

「コウガ！」

振り返るとラストがこちらへ走って来た

「どうなってる、何であそこから火が？」

「オレに聞かれても分かんねーよ・・・」

「大変だ！！」

上から駆け下りてきた消防隊の一人が大声で叫んだ

「火災現場の倉庫の中にボスとアルヴァが閉じ込められた！」

辺りからどよめきが起こった

遡る事数分前――

戦士たちの武器をしまつてある倉庫に、アルヴァはひそかに忍び込んでいた

倉庫のシャッターを開けるためには暗証番号を入力する必要があるが

彼は銃を向けてボタンを壊し、強引にシャッターを開けた

中に人は居ないと思い込んでいたのか、中を見渡す事無く懐から携帯用の銃火器を取り出した、が

「何してんだ？」

と言う声に驚き、思わず「わっ」と声を出してしまった

「こんな所でこんな物騒なモン使うなよ、燃え上がっちゃうぜ、ここ」

声の主はカルロ、突然の侵入者に驚くことも無く暢気に煙草を吸い続けている

「・・・何で此処に居る」

アルヴァが問う

「何で？様子を見に来たんだよ」

倉庫の中には様々な形の武器がそれぞれカプセルの中に入っており中は羊水で満たされている。

壊れた武器を再構築出来る物だ

「そんなことよりオメーは何しに来た？」

「・・・・・・・・」

アルヴァは答えない、そっぽを向き、知らん顔をする

だが倉庫に入ることの許されていない人間が禁じられた場に立ち入れば何も無いはずは無い

「答えろ」

拳銃をアルヴァに突き付けてもう一度彼は問うた

「安心しろ、別に俺は何もする気はない、
ここの物を奪うつもりもない……仕事を果たしに来ただけだ
！！」

言っていると彼は銃火器を素早くカルロに向け、発射した

間一髪噴射された火の玉からカルロは逃れたが、炎はカプセルに当たり、

中の羊水に触れた途端、一気に炎上、電気コードにも炎は燃え移り、
他のカプセルも次々と破壊していった

倉庫の中はあっという間に炎に包まれた

「……やってくれたな、どうすんだ修理代高けーんだぞ」

危険な状況にも関わらず金の心配をするカルロは至って冷静だ

アルヴァは拳銃をカルロに向け、喋りだす

「お前を殺す、それが俺の仕事だ。」

「やっぱな……そんな事だろうと思ってたよ」

自分の命が危険にさらされていると言うのに彼は笑っている
そして次にこう言った

「お前……一奴等のスパイだろう？」

EP3裏切り（後書き）

なんつーかまあアレですよ
半分ギャグみたいになってますね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9617a/>

Shadow hanter

2010年10月9日16時21分発行